

日本分類学会連合ニュースレター

*News Letter published by the Union of
Japanese Societies for Systematic Biology*

No. 4 [2003年10月31日]

連載「連合加盟学会の活動紹介」

日本生物地理学会

渡部 元 (日本生物地理学会庶務幹事長)

森中 定治 (日本生物地理学会会長)

日本生物地理学会は、1928年(昭和3年)に蜂須賀正氏が渡瀬庄三郎と共に設立した。渡瀬庄三郎は、区系生物地理学においてトカラ列島の悪石島と宝島の間で設けられた「渡瀬線」によって著名であり、生物の分類に携わる者で彼の名前を知らない人はおそらくいないだろう。また、彼はハブや野鼠の駆除のためにジャワマングースをインドから沖縄へ移入し、ウシガエルを実験用として輸入した。昨今の移入種問題と相俟ってそれらの功罪は徹底的に議論すればよいと思うが、社会の向上のために生物学を積極的に活用しようとしたポジティブな精神の持ち主であることは、おそらく間違いないであろう。

蜂須賀正氏は、渡瀬庄三郎ほどには知られていない。彼は、阿波蜂須賀家第18代当主として生を受けた一方、鳥類学者として多くの成果を生み出した。ケンブリッジ大学への留学時に博物学の大家であるロスチャイルド卿と知り合い、グリーンランドやアフリカへの生物調査を目的とした探検行を何度も行った。初めて野生ゴリラに出会った日本人は彼とのことである。そして、絶滅した鳥「ドードー」の研究に打ち込んだ。蜂須賀正氏は型破りの人でもあった。彼のひととなりを表す様々なエピソードが伝えられているが、従来からの伝統と作法を重んじ、それに従って大過なく生を全うする当時の通念からは想像外の人生であり、周辺の人や一般社会から大きい批判を受け、非常識の人と批評された。奇しくも、本年は彼の生誕百年に当たり、4月13日に立教大学(東京都豊島区池袋)において「蜂須賀正氏生誕百年記念シンポジウム」を開催した。

蜂須賀正氏を人間としてどう考えるか、日本生物地理学会に所属する現会員が、3/4世紀を経た現代の世相に照らして判断すればよい。私が子供の頃は、緑豊かな環境と、輝いた未来があった。現代の社会に、未来を輝かしく感じる若者がどの位いるであろうか。今世紀から我々は、マニュアルのない先の見えない時代に入ると言われる。人類は良いことも悪いことも、その規模と将来に与える影響において、かつて経験したことのないパワーが発揮される時代となる。蜂須賀正氏は、伝統に沿

わない非常識の人と評されたが、彼の行為は彼の恣意ではなく彼の哲学に起因し、それに従って独自の判断をした結果であることが多いと考える。蜂須賀正氏の生き様は、マニュアルのない、未曾有の時代へ対処し、希望のもてる未来を次世代に贈るための有力なひとつのツールを我々に残したと考える。この原点を現日本生物地理学会は尊重したい。

【目的】生物地理学的研究とその普及が第一義である。しかしながら、昨今における生物学の著しい発展に伴い、現代生物学では明確な領域区分が困難になりつつある。また、社会に対する生物学のもつ意味は変わってきており、人類社会への貢献を目的として生物学に係わる幅広い課題を扱う。

【会員数と構成】会員は300人強で、第一線の研究者はもちろん、退職された方やライフワークとして生物学を楽しまれる方も多い。

【年会費】一般会員6,000円、団体会員8,000円、維持会員10,000円

【会員への配布物】日本生物地理学会会報：年一回11～12月に発行。総説、原著論文の他、短報や論考(Scientific Views)、書籍紹介や年次大会の案内など幅広く掲載。分類学に関わる原著論文は50%以上を占める。2002年度発行の第57巻には、石田昭夫氏による日本産淡水ケンミジンコ60種を集大成した70ページに及ぶ図譜が掲載された。Biogeography:1999年に創刊した新英文誌。年一回8月に発行。現在は、総説と原著論文が掲載されるが、将来はもう少し幅のあるものにした。2003年に出版されたvol.5には原著論文12編が掲載され、そのうち9編が分類学的単位の記載であり分類学の論文であった。対象生物の内訳は、昆虫6編、甲殻類2編、魚類3編及び線虫1編であった。初記録や稀な地域、興味深い地域からの記録なども論文としての考察があれば、掲載する。Fauna Japonica, Biogeographica:不定期。学会通信:6月に発行。各委員会、幹事会の報告や定期評議員会の報告などを掲載。年次大会プログラム:3月に発行。

【年次大会】現在は、年一回(4月、土～日)、東京で開催。土曜午前中:評議員会、午後:一般講演、特別講演、総会など、夜:懇親会(1)、日曜午前中:シンポジウム、午後:シンポジウム、ミニシンポ、特別講演など、夜:懇親会(2)。当学会のシンポジウムの特徴は、ひとつの講演時間が長く、講演中に質問を挟むこともでき、徹底的(無論限度はあるが)に討議できることであり、こ

の数年大変な活気である。2001年度は「生物多様性を記載する方法-データベース化とその理論的基盤-」と題して、多様な生物をどのように記載していくかを新しい視点から討議した。演者は、企画委員長である三中信宏氏(農業環境技研)「生物多様性の認識-分類学的概念装置は働き続けるか」、河田雅圭氏(東北大学)「進化生態学から見た生物多様性の記載と登録システム」、村上哲明氏(京都大学)「分子アルファ分類-分子情報を用いて生物学的種を効率よく認識する試み」、大野克嗣氏(イリノイ大学)「アルファ分類に代わる生物分類学はありえるか」、さらに矢原徹一氏(九州大学)、粕谷英一氏(九州大学)に各発表に対してあるいは総合的なコメントをお願いした。従来の分類学から踏み出した新しい体系、分子を用いた分類の試み、そして少数の分類学者だけの研究から一般人や産業(企業)をどのように巻き込んでいくかなど興味深いアイデアが出された。また、会場からも様々の意見が出て時間を感じさせない白熱の討議となった。2002年度は、「生物地理学の次元:歴史と系統、群集と生態、形態と分子」というテーマで、三中信宏氏「歴史生物地理学における系統樹構築問題-グラフ構造の推論のあり方について」、加藤和弘氏(東京大学)「生物群集の多変量解析とその応用」、長谷川雅美氏(東邦大学)「オカダトカゲの繁殖戦略とその地理的変異」、疋田努氏(京都大学)「東南アジアのトカゲ類の生物地理:分子と形態から見た地理的分布」、向井貴彦氏(東京大学)「汽水魚・通し回遊魚における地理的分化と生殖隔離の維持機構」が講演され、生物地理学の基本に戻り、しかしながら分子データに基づく系統学的情報を骨組みに加えた新しい視点での論議が進められた。群集における種構成の変化をどのように記述するか、島嶼に固有の進化戦略に関する仮説、近縁異個体群の接点における生殖隔離と浸透に関する論議など群集や個体群のダイナミクスについて感心のある人には興味深い内容となった。2003年度は、前述のように「蜂須賀正氏生誕百年記念シンポジウム」を開催し、当連合の加藤雅啓代表、自然史学会連合の森脇和郎代表、日本学術会議の黒川清会長をはじめとして沢山の方にお出で頂き、楽しく有意義なひとときを過ごした。

【事務局】〒333-0805 川口市戸塚鉄町11-20 森中定治 TEL & FAX: 048-295-4574, e-mail: QYV04336@nifty.ne.jp

【問い合わせ、入会申し込み】事務局か会計幹事長である向井 貴彦(〒277-8572 千葉県柏市柏の葉5-1-5 東京大学大学院新領域創成科学研究科 先端生命科学専攻, TEL: 04-7136-3663, FAX: 04-7136-3669, e-mail: mukai@k.u-tokyo.ac.jp) まで。

日本蘚苔類学会

神田 啓史(日本蘚苔類学会会長)

日本蘚苔類学会は昭和47年4月、奈良教育大学の創立総会において発足して以来、一昨年の大分大会で学会創立30周年を迎えました。本学会の目的は「蘚苔類の進歩と普及をはかり、併せて会員相互の親睦をはかる」ことです。コケ類に関するさまざまな分野の研究者、専門家、アマチュアやコケ愛好家が集い、全国各地に340名(平成15年8月現在)の会員がいます。どなたでも随時入会でき、学会の活動に参加できます。学会の刊行物は「蘚苔類研究」(Bryological Research)で、本誌は創立から約25年間続いてきた「日本蘚苔類学会会報」(Proceedings of the Bryological Society of Japan)を引き継ぐ蘚苔類に関する専門誌です。年3回(3月、7月、11月)発行されており、日本におけるコケ研究の唯一の情報誌でもあります。毎年8月上旬に開催される日本蘚苔類学会の年次大会には70~80名の会員が参加されます。講演発表、総会、シンポジウムの他に、コケの野外観察会、同定会等も行っており、大会では出来るだけ一同に集まって議論が出来るように、宿舎を同じにするようにしています。専門家とアマチュアという垣根を取り外し、互いのメリットを生かせるのもこの学会の特長ともいえると思います。大会時の展示発表は歴史があり、学術発表の他に、写真展、実物の標本展、時には高校生の発表など大変バラエティーに富んでいますが、むしろこの傾向が強まることを期待しています。今年度の大会では、学会創立30周年記念事業として刊行された「コケ類研究の手引き」(2003年、本会発行)をテキストにしたシンポジウムが開催され、非常に好評でした。採集や同定に及んでは、お話ばかりではなく、実際に標本物を見て、触れて、光に翳さして、場合によっては嗅いだり、噛んでみたりすることも本学会ならではの光景です。

大会時の他にも、本会は地域の様々な博物館、研究所、資料館等でのセミナー、観察会、実習に協力しています。実際にこれらの企画、事業は定例化している所もあり、学会としては積極的に応援しています。そのいくつかを紹介すると、コケ実習講座(兵庫県立人と自然の博物館)、コケ類入門講座(国立科学博物館新宿分館)、コケ研究入門講座(岡山コケの会)、コケ植物の分類講座(平岡環境科学研究所)、コケ茶会等があります。

会員の希望によって、メーリングリスト(koleml)へ登録すれば、インターネットの電子メールによって交流が出来、学会からの案内の他、コケ最新情報が配信されています。

小さな植物を対象にしている学会ではありますが、コケ植物は古くから微妙な環境変化に応答する性質が知られており、コケが指標植物として扱われる研究も増えつつあります。最近、学会が協力した事業として絶滅危惧

種の実態調査がありましたが、コケ植物も楽観は許されない状況でした。他の植物と異なってコケ植物の産地を確認し、監視することは容易ではありませんが、コケ植物自身が周囲の環境変化を感知して、応答している状況を把握する方法を開発することによって、周辺の生育環境の保全にも貢献できると考えています。つまり、生育環境そのものを保全する説得力のある研究がコケ植物に期待されていると考えています。更には、最近の蘚苔類に関係する講演の中でも、とくに増えているのが分子生物学的な研究です。コケ植物を扱った研究としては未だ着手したばかりの分野ともいえますが、コケ植物の系統や生活史、生理的特性をうまく利用することによって、分子レベルでの分類学、生態学、生理学への先端研究に大きく寄与できると期待しております。

蘚苔類学会はコケを覚えるという初歩的な段階から、研究手法の開発や先端研究に至るまで蘚苔類に関わる幅広い研究の進歩と普及を計るために、これからも積極的に活動を続けていくつもりです。

【学会に関する問合せ・入会申込み先】

〒717-0602 岡山県真庭郡川上村上福田
岡山理科大学自然植物園・蒜山分室 日本蘚苔類学会
庶務幹事 西村直樹
TEL & FAX: 0867-66-7012
E-mail: nishimur@rins.ous.ac.jp
日本蘚苔類学会ホームページ: <http://scl.cc.kochi-u.ac.jp/~bryosoc/>

日本甲殻類学会

馬場 敬次 (日本甲殻類学会会長)

日本甲殻類学会は、甲殻類を対象にした学会として1961年(昭和36年)4月に世界に先駆けて誕生し、甲殻類専門の学会誌を1963年から発行している。

【会員数】321名(国内会員) + 44名(外国会員)

【大会】2002年度 熊本大学(2002年11月8~10日)

2003年度 琉球大学(2003年11月22~23日予定)

【シンポジウム】2002年度「甲殻類の寄生・共生」

2003年度「サワガニ類の生物学と地史」、「ガザミ類の生物学と増養殖」

【学会誌】甲殻類の研究 (Researches on Crustacea):

Nos. 1 (1963) - 22 (1992)

Crustacean Research (英文誌) [Researches on Crustacea を改称]: Nos. 22 (1992) - 31 (2002)+

Cancer (和文誌): 第1号(1991) - 第11号(2003)+

【分類学研究の動向】

<大会参加者数>

第40回大会(2002年): 110名

第41回大会(2003年): 120名申込

<学会における分類学関連の講演数>

2002年: ポスター発表 15/38 口頭発表 1/20

2003年: ポスター発表 11/34 口頭発表 7/26

<学会誌における分類学関連の論文数>

Crustacean Research 30 (2001): 6/13

Crustacean Research 31 (2002): 2/7

Cancer 11 (2002): 4/11

Cancer 12 (2003): 5/11

【分類に関する最近のトピックス】

<学会員による出版物刊行>

朝倉 彰(編著)(2003): 甲殻類学-エビ・カニとその仲間の世界. 291pp. 東海大学出版会

【ホームページ】

2003年10月試行運用中, 2003年12月正式開設(予定)

日本分類学会連合加盟学会の大会・シンポジウム

日本プランクトン学会

日本プランクトン学会創立50周年記念大会、2003年日本プランクトン学会・日本ベントス学会合同発表大会、及び公開シンポジウムが下記のとおり開催されます。

会期：2003年11月22日（土）～11月24日（月）

11月22日（土）

日本プランクトン学会設立50周年記念招待講演

一般講演（口頭発表）

日本ベントス学会総会

自由集会（18:00～20:00）

11月23日（日）

公開シンポジウム（参加無料）

「プランクトン・ベントス研究のフロンティア」

懇親会（18:00～20:00）

11月24日（月）

一般講演（口頭発表）

会場：東京都港区港南 東京水産大学

会費：参加費：一般3,000円 学生2,000円

懇親会費：一般5,000円 学生2,000円

（当日参加はそれぞれ1,000増しとなります）

大会および公開シンポジウムの詳細は、大会ホームページ（http://homepage3.nifty.com/plankton_benthos）をご覧ください。

日本甲殻類学会

第41回日本甲殻類学会琉球大学大会が下記のとおり開催されます。

会期：2003年11月22日（土）～11月23日（日）

11月22日（土）

9:00～9:05 会長挨拶

9:05～12:00 一般講演

12:00～13:00 昼食

13:00～17:00 ミニシンポ1「ガザミ類の生物学と増養殖」；一般講演

18:00～ 懇親会（琉球大学内で行います）

11月23日（日）

9:00～12:00 ミニシンポ2「サワガニ類の生物学と地史」；一般講演

12:00～13:00 昼食

13:00 記念撮影

13:00～14:00 総会

14:00～16:00 一般講演

会場：琉球大学西原キャンパス 理学部新棟

参加費：一般4,000円 学生3,000円

懇親会費：一般4,000円 学生3,000円

連絡先：琉球大学大会実行委員会 諸喜田茂充

〒903-0213 沖縄県西原町千原1

琉球大学理学部海洋自然科学科

E-mail: f033024@eve.u-ryukyuu.ac.jp

Tel & Fax: 098-895-8555

種生物学会

第35回種生物学シンポジウムが下記の通り開催されま

す。

会期：2003年12月12日（金）～12月14日（日）

12日 プレシンポジウム

18:30～20:30 川北篤（京大・環境学研究科）「トウダイグサ科カンコノキ属における絶対送粉共生系の起源と進化」

13日 シンポジウム1「森林における長期大規模研究の成果と展望」

8:30～8:40 正木隆（農林水産技術会議）他「森林の長期大規模研究－失われなかった10年間－」

セッション1：樹木の繁殖・更新機構

8:40～9:15 酒井章子（筑波大）「熱帯雨林の季節を明らかにする－低地フタバガキ林での11年間の観測から－」

9:15～9:50 柴田銃江（森林総研）他「群集レベルのマスティングの生態的意義」

9:50～10:25 星崎和彦（秋田県立大）「種子捕食者を介した森林群集内の直接・間接相互作用」

10:35～11:10 小南陽亮（森林総研九州）「果実と鳥の共生関係を駆動する植物種と散布種子の空間分布におけるその役割」

11:10～11:45 大住克博（森林総研関西）他「実生期のデモグラフィーにもとづく更新様式の不均質性の解析」

セッション2：樹木群集の構造、多様性とダイナミクス

12:45～13:20 伊藤明（大阪市立大）他「大面積調査区を用いた熱帯雨林樹木の空間構造と地形ニッチ分割の解析」

13:20～13:55 西村尚之（佛教大）他「異なる森林タイプにおける樹木群集の動態」

13:55～14:30 武生雅明（東京農大）他「東アジアにおける緯度と標高傾度上での生態系パラメータの変化パターン」

セッション3：将来に向けて

14:40～15:15 日浦勉（北大）「大規模野外実験による生物多様性の維持機構と生態系機能の解明」

15:15～16:00 総合討論

17:00～18:00 ポスター発表

14日 シンポジウム2「水生植物の最近の研究から見えてくる課題」

9:00～9:10 角野康郎（神戸大） 趣旨説明

セッション1：分子レベルのアプローチが明らかにしつつあること

9:10～9:50 亀山慶晃（北大）「水生植物タヌキモ類における不稔現象」

9:50～10:30 志賀隆（神戸大）「日本産コウホネ属の形態変異と遺伝的変異」

10:40～11:20 上杉龍士（東大）「マイクロサテライトマーカーにより明らかになったアサザの遺伝的構造と種子繁殖」

11:20～12:00 飯田聡子（神戸大）「オオササエビモの遺伝的多様性の起源と生態的多型」

セッション2：種生態と保全へのアプローチ

13:00～13:40 柴山弓季（神戸大）「絶滅危惧植物における生活史研究の重要性－異型花柱性植物ガガブタの場合」

13:40～14:20 高川晋一（東大）「霞ヶ浦におけるアサザの更新と土壌シードバンクからの個体群再生」

14:20～15:00 國井秀伸（島根大）「水生植物は中海再生の鍵となるか－汽水域の再生事業の現状と課題－」

15:15～16:15 総合討論

会場：六甲山YMCA（旧称YMCA六甲研修センター）

〒657-0101 神戸市灘区六甲山町北六甲875

Tel: 078-891-0050

参加費：一般5,000円 学生 3,000円

宿泊費：14,000円／2泊

懇親会費：一般5,000円 学生4,000円

大会事務局：第35回種生物シンポ運営事務局 工藤洋

〒657-8501 神戸市灘区鶴甲1-2-1

神戸大学大教センター生物

E-mail: kudo@biol.sci.kobe-u.ac.jp

Tel: 078-803-5723

シンポジウムに関する詳細は学会ホームページ<http://sssb.ac.affrc.go.jp/>を御参照下さい。

第3回日本分類学会連合総会・公開シンポジウム

第3回日本分類学会連合総会・公開シンポジウムを下記の要領で開く予定です。お忙しいことは存じますが、ご出席下さいますようご案内いたします。関係者に周知していただければ幸いです。

期間：2004年1月10日（土）～1月11日（日）

会場：国立科学博物館分館（東京都新宿区百人町3-23-1）

日程・プログラム（予定）：

1月10日（土）10:30-12:30：日本分類学会連合総会
13:30-17:30：シンポジウム1

1月11日（日）10:00-12:30：シンポジウム2

◎シンポジウム1：「移入種と生物多様性の攪乱」

1. 「外国産クワガタムシの大量輸入がもたらす生態リスク」五箇公一（国立環境研究所）
2. 「無融合生殖種と有性生殖種の出会い：日本に侵入したセイヨウタンポポの場合」芝池博幸（農業環境技術研究所）
3. 「バラスト水によるプランクトンの導入」大塚攻（広島大学）、Rubens Lopes (University of Sao Paulo), Keun-Hyung Choi (San Francisco State University)
4. 「島の外来種問題：琉球列島の爬虫・両生類の場合」太田英利（琉球大学）
5. 「多様性保全か有効利用か：ブラックバス問題の解決を阻むものとは？」瀬能宏（神奈川県立生命の星・地球博物館）
6. 「移入種対策について」上杉哲郎（環境省自然環境局）

◎シンポジウム2：「新種記載をスピード・アップする方策を探る」

1. 「新種記載はスピード・アップできるか？」馬渡峻輔（北海道大学）
2. 「新しい方法で標本からの形質を抽出する」白山義久（京都大学）
3. 「形質記載をスピードアップする方法～原生生物における試み」堀口健雄（北海道大学）
4. 「分類学情報を共有するシステムを開発する」伊藤元己（東京大学）
5. 「分類学研究者を増やす方策」松井正文（京都大学）

国際会議のご案内

日本学術会議事務局より同会議主催の国際会議「持続可能な社会のための科学と技術に関する国際会議 2003 - エネルギーと持続可能な社会のための科学」のアナウンスメントが届きました。平成15年12月16日(火)～19日(金)に行われるこの国際会議では、講演とパネルディスカッションのほか、エネルギーやSustainability Scienceなどに関係するポスター・成果物の展示も企画されています。

同国際会議の詳細については<http://www.congre.co.jp/ess2003/>をご覧ください。また、展示をご希望の場合は、この国際会議に関する問い合わせ先：日本学術会議事務局学術部情報国際課国際調査係(03-3403-1091; i266@scj.go.jp)に11月28日(金)(必着)までに送付することとなっております。

国際シンポジウムのご案内

国際シンポジウム「アジア及び環太平洋地域における自然史標本収集・管理と自然史研究」が、11月28日(金)に国立科学博物館分館(東京都新宿区百人町3-23-1)で開催されます。これは国立科学博物館が行っている「アジア及び環太平洋地域における自然史系博物館との研究協力」事業の一環として開催されます。海外からの講演者は自然史系博物館や大学内に大きな自然史コレクションをもつ機関の代表者です。講演の内容はそれぞれの地域における自然史コレクションや自然史研究の現状に関するもので、本年度は韓国、中国、インドから8名の参加を予定しています。参加は自由・無料です。プログラム等の詳細は国立科学博物館のホームページ(<http://research.kahaku.go.jp/symposium/sympo/news.html>)に掲載されています。

[問合せ先] 〒305-0005 茨城県つくば市天久保4-1-1
国立科学博物館植物研究部植物第一研究室 秋山忍
TEL: 029-853-8972 FAX: 029-853-8401
E-mail: akiyama@kahaku.go.jp

日本分類学会連合の活動報告 IV

ニュースレター 3号以降の活動

2003年

- 4月30日 「日本分類学会連合ニュースレター, No. 3」を刊行。5月6日にホームページに掲載した。
- 5月12日 日本進化学会が新規加盟(計26学会)。
- 5月12日 第6回役員会を開催(東京大学理学部)。学会から募集した科研費(データベース)の配分を検討した。
- 7月16日 宣伝フェアについてジュンク堂と打ち合わせをした(松浦, 稲が同席)。
- 9月16日 来年1月のシンポジウムのプログラムが決まったので、加盟学会に配信した(分類連合庶第03-06号)。
- 10月7日 「生物多様性国際フォーラム」(10月4-10日; 筑波国際会議場)のイベントとして、GBIFとの共催シンポジウム「Symposium on Taxonomy and Biological Databases: Toward the Understanding of Biodiversity in Japan」を開催した。
- 10月7日 第7回役員会を開催(筑波国際会議場)。連合の宣伝企画、2005年の連合シンポジウムと科研費の申請、データベース関係の科研費の申請、来年1月のシンポジウム、執行部の改選などについて検討し、今後のスケジュールを打ち合わせた。

日本分類学会連合 2003年度役員会報告

連合の活動報告IVにありますとおり、10月7日に筑波国際会議場で行われた本連合とGBIFとの共催シンポジウムの後、同所で第7回役員会を持ちました。出席者は加藤連合代表、松浦副代表、伊藤会計幹事、友国庶務幹事の4名でした。ここで審議・検討した事項を簡単に報告いたします。

1. 連合の宣伝企画

次の要領で実施する。後日実施要領を加盟学会に配信して参加を募る。

期間: 2004年2月1日(日)～3月15日(月)

場所: 池袋ジュンク堂7階

- 内容: 1) 出版物の展示・販売
- 2) 学会の宣伝用チラシの配布
- 3) ポスターの掲示
- 4) ギャラリートーク

2. 2005年の連合シンポジウムと科研費の申請

科研費の研究成果公開促進費(提出: 11月17～20日)を申請するために、2005年のシンポジウム実施要領を早急に決める必要がある。10月22日締め切りで加盟学会

にテーマを公募し、それを基に執行部で検討ののち申請書の作成をすることにする。

訃報

3. データベース関係の科研費の申請

伊藤が記入，提出する。

4. 来年1月のシンポジウム

テーマは，シンポジウム1「移入種と生物多様性の攪乱」，シンポジウム2「新種記載をスピード・アップする方策を探る」に決定済。講演要旨集を作成して有償で配布する。そのための原稿を12月15日までに集める。

5. 執行部の改選

現執行部は全員任期切れとなるので，次期執行部の選出を来年の総会の議題にする。執行部役員のほかに，本人の希望によりWebとNLの担当者も交代することとする。

種数調査委員会から

日本分類学会連合の日本産生物種数調査委員会では，日本で御活躍されている分類学者の皆様方に御協力いただき，日本産生物の既知種数，推定未記載種数等の調査を行ってまいりました。お忙しい中，調査に御協力いただいた研究者の方々には，厚く御礼申し上げます。

調査結果は，北海道大学総合博物館のサーバーを一時的にお借りして，試験公開という形で，調査に御協力いただいた方々にのみ公開しております。10月上旬には国立科学博物館のサーバーに移し，一般公開する予定で準備を進めてまいりましたが，ウェブ上でデータベースの内容を表示するプログラムの開発に時間を要し，一般公開が遅れております。準備が整い次第一般公開いたしますとともに，連合ホームページで案内を掲載し，皆様方に御連絡差し上げる予定でおります。御迷惑をおかけしますが，もう少々お待ち下さい。

(北海道大学大学院理学研究科 柁原 宏)

日本分類学会連合ホームページ開設

日本分類学会連合では，昨年ホームページを開設いたしました(<http://www.bunrui.info>)。各加盟学会もリンクしております。ニュースレターも含めて，連合の活動を随時掲載していきますので，連合・加盟学会の活動状況を随時ご確認下さい。

井上健氏(信州大学教授;種生物学会,日本植物分類学会会員)は2003年7月28日,海外調査中の不慮の事故により急逝されました(享年55歳)。種生物学会和文誌編集委員長,幹事を歴任され,日本植物分類学会では絶滅危惧植物委員会の委員を務められました。また,井上氏は,日本分類学会連合設立準備委員会の委員として連合設立に多大な御貢献をされました。ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

[編集後記]

少々遅くなりましたが日本分類学会連合ニュースレター4号が発刊されました。今号は会員寄稿が少なく,シンポジウム等に関する報告もなかったため,これまでの号に比較してかなり少ないページ数になってしまいましたことお詫び申し上げます。

連合としての新たな試みである「日本産生物種数調査」は,皆様方の多大な御協力により調査結果がある程度まとまり,近いうちにwebで一般公開される予定です。既知種の調査一つとっても,これまで整理が不十分であった分類群に関しては,既知種をリストアップすることから始まり,シノニム,学名の変更のチェックなどなどかなりの労力を要されたことと思います。御協力いただいた皆様方にはこの場を借りて御礼申し上げます。

日本から何種の生物が記載・記録されているのか,未知種はどれほどいると予想されるのか,ということは個々の分類群では,専門家の努力により,ある程度まとめられてきたことと思います。今回,日本産の生物全てを対象にデータをとりまとめることにより,日本の分類学的研究の現状を具体的なデータで裏付けることが可能になります。無論,連合に加盟していない学会等もあり,全てを網羅するのは容易なことではないと思いますが,日本の分類学の歴史にとって,また連合にとって大きな一歩になることと思います。

一般公開にあたっては,著作権に関して心配されておられる方も多いかと存じます。試験公開版を御覧になられた方は御存知のことと思いますが,各分類群のデータの著作権に関しては当該分類群の担当者に属することが明記されております。もし,御不明の点がありましたら,日本分類学会連合もしくは日本産種数調査委員会まで御連絡いただきたく,よろしく御願いたします。

来年1月の第3回連合シンポでは移入種をテーマに,動植物を取り混ぜて講演していただきます。最近,新聞,本,雑誌等で取り上げられる機会が多い移入種ですが,生物多様性を脅かす移入種に関して最新の正確な情報を得るよい機会だと思いますので,連合加盟学会の皆様方はもちろんのこと,周囲の方にも声をおかけいただき,

多数の方々に参加していただきたいと存じます。

また、移入種シンポの翌日には、新種記載に関するシンポジウムが開催されます。新種を記載された経験をおもちの方はご存知のことと思いますが、新種1種を記載するだけでも非常に多くの時間と労力を要します。新種記載のプロセスにおいて、どの部分をどのように変更していけば、スピードアップできるのか？、分類学者の数を増やすには？など、記載分類に携わる研究者は無論、分類、生物多様性に興味をお持ちの方には、重要なシンポジウムです。こちらも移入種シンポ同様、多数の皆様方の御参加をお待ちしております。

これまで同様、ニュースレターでは皆様からの忌憚のない御意見を募集しております。連合に関する御意見あるいは分類学関連の最近の話題・動向など、下記連絡先に御寄稿いただければ幸いに存じます。

〒002-8502 札幌市北区あいの里5条3丁目1

北海道教育大学教育学部札幌校生物学教室

Tel: 011-778-0340 Fax: 011-778-8822

E-mail: takakug@sap.hokkyodai.ac.jp

また、連合および加盟学会の活動状況に関しましては、これまで同様に連合ホームページ(<http://www.bunrui.info>)を御参照いただきたく御願ひ申し上げます。

(ニュースレター編集担当：高久元)

日本分類学会連合ニュースレター 第4号

2003年10月31日発行

発行者 日本分類学会連合

事務局 〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1

国立科学博物館動物研究部 友国 雅章

編集者 高久 元
